

1. 問題 1

球技種目の一つひとつには、それぞれ固有のルールや特質があるが、大別して、サッカーやラグビーなどのイギリスで誕生したスポーツ（以降イギリス型とよぶ）とアメリカンフットボールやバスケットボールなどのアメリカ生まれのスポーツ（アメリカ型とよぶ）との間には、いくつかの重要な相違がある。

その一つはもちろん「オフサイド」ルールの問題であるが、他にも選手の機能分化、メンバー交代の自由度の問題やゲーム中における監督・コーチからの指示の方法なども重要な相違点といえる。

アメリカ型スポーツのルールには、i 仕事が細分化専門化され、選手一人ひとりが技能や技術の質を磨き易いこと。ii 作戦タイム、メンバーチェンジによって、ゲーム中の戦法から局所の戦術に至るまで監督の指示が選手に徹底できること。iii フリーなメンバーチェンジによって選手のコンディションを常に良好に保てることなど、質の高い攻防が展開できることを目的とした「アメリカ的合理主義」が貫かれている。

スポーツが資本主義の成立、発展過程のなかで生まれてきたことからみて、この「合理主義」のルールは当然と言えるのかもしれない。

一方、イギリス型スポーツのルールには、「合理主義」というよりは、むしろ「非合理主義」的で「前近代」的な側面が見えてくるのである。

オフサイドルールは得点することを難しくしているし、ゲームが始まれば終わるまで監督、コーチは選手に指示を出しづらいのが現実である。またメンバーチェンジは近年数人程度は許されるようになったが、全くフリーなアメリカンフットボールやバスケットボールとは異なり、選手は疲労との戦いを余儀なくされる。

資本主義社会の発展とともに誕生してきたスポーツでありながら、「イギリス型」スポーツには、何故「前近代」的な要素が色濃く存在するのか。

2. 解答 1

一八〇〇年代のイギリス資本主義社会において政治的・文化的ヘゲモニーを握っていたのは、封建勢力である貴族・ジェントリー（地主階級）であった。彼らは文化的ヘゲモニーとしての「ジェントルマン像＝紳士像」を作りあげ、新興ブルジョアジーをも「紳士道」に包摂した。そして、パブリック・スクールは、「ジェントルマンの製造工場」としての役割を担ったのであり、封建勢力である貴族・ジェントリーと新興ブルジョアジーを結合し、「ジェントルマン」を製造するために、フットボールやボート、クリケットなどの集団スポーツの組織性を利用した（これまでのフットボールをルールに基づく紳士のスポーツにつくりかえて）。それ故、イギリス生まれのスポーツには、「紳士道」に基づくルール、前近代的ともいえる要素を含み持つのである。「FA」設立当初は、「FA」は、貴族・ジェントリーのための組織であり、上流階級のクラブの連合体であった。

3. いくつかの「偶然？」の重なり

資本主義社会をリードしたのが封建勢力であり、サッカーやラグビーもこの人びとが中心となって作りあげたものである。当時のイングランドでは、いくつかの「偶然？」としか言えないことが重なることによって、通常考えられないことが起こっていたのである。そして、それは当時の政治、経済の状態を把握することを抜きには語れないことであるが、ここでは、紙面の都合で、骨組みだけを述べることにする。

① 宗教改革、絶対王政、重商主義・植民地体制

一五三四年に断行した宗教改革（国王至上権）、修道院解散の結果として、ヘンリー八世は今までローマ教皇に納められていた教会税や全土の三分の一におよぶ修道院の所領を手中におさめた。年収にして九万ポンドもの増収は、ヘンリー七世以降の絶対王政と重商主義・植民地政策の財政的基盤を固める役割を果たした。

そして、一五八八年にはスペイン無敵艦隊を撃破し、公海上の覇権をスペインから奪い取り、

一六五一年には、中継貿易からオランダ人を排除するために「クロムウェル航海法（六〇年、六三年に補強）」がつくられ、植民地との交易のイギリス資本による独占体制（重商主義・植民地体制）を築きあげたのである。

一六四〇年から一七七〇年までに輸出量で六～七倍、輸入にいたってはそれ以上の発展を遂げ、貿易相手国もヨーロッパ内の地域から非ヨーロッパ世界へと一挙に広め、「商業革命」を達成するのである。

②ジェントリーの勃興（一六世紀）

しかしながら、重商主義路線は財政支出を膨らませ、一六世紀後半には修道院から奪った所領の大半を切り売りするのである。

バラ戦争や黒死病によって貴族家が激減していたイングランドでは、切り売りした土地を官僚や貿易商が買い取り、ジェントリー階層を補填し、貴族とともに地主階級の一翼を担うまでになるのである。

その後も重商主義戦争は間歇的に長期にわたり、膨大な戦費は国債の発行によって賄われたが、国債発行にはイングランド銀行の設立と地租が重要な役割を果たした。地租は中小地主、自営農民に重い負担となる一方、大地主や貿易商は国債を手に入れ高率な利子を得て潤い土地所有の集中化が進むことになる。

③ピューリタン革命、名誉革命

一六四九年、チャールズ一世が処刑され、共和国がクロムウェルによって樹立される（ピューリタン革命＝絶対王政の終焉）。

クロムウェルの死後王政が復活するが、名誉革命（無血革命）によって新国王ウィリアム三世は「権利の章典」を承認し、イギリスの議会政治がはじまる。いわゆる「国王は君臨すれど統治せず」となった。

④十九世紀＝緩やかに持続的な経済成長

一九世紀におけるグレート・ブリテンの国民総所得は、一八一〇年代を除き、一貫して年一・五ないし四パーセントと緩やかで持続的な成長をとげつつ、特に商・工業の発達が著しく、二一年には工業部門が、五〇年代には商業部門

が農業部門を追い抜き、その後も増加し続けている。

⑤『いくつもの「偶然？」の重なり』のまとめ
ヘンリー八世の宗教改革が、後々の重商主義・植民地体制につながり、一方で、ジェントリーの勃興の条件をもつくり出した。また、ピューリタン革命・名誉革命によって、議会の多数を占める貴族・ジェントリー主導の社会をつくり出し、緩やかな経済発展と植民地よりの利益が、資本主義社会でありながら、ジェントリーの支配を維持することを可能にしたのである。

4. ジェントリーの支配権維持の手法＝イギリスの交通手段の発達を例に

①一八世紀後半から一九世紀初頭にかけて、基礎に碎石を敷きその上に細かな石をかぶせ、その表面にコールタールやアスファルトで覆う舗装術が編み出され、これによって急行便馬車が発達した。これらの舗装道路はジェントリーの私有地で彼らは使用料を取って儲けることができた。

この時期、運河建設も行われた。三代目のブリッジウォーター公爵フランシス・ヘンリーは、石炭の産地である領地のワーズリーからマンチェスターまでの運河を通すことに成功した。谷を渡るのにローマの水道橋を応用するなどの大工事の末に成功した。これによって、小麦価格は九割も安く、石炭価格にいたっては小麦以上に安価となり、ヘンリーは石炭の販売でも、運河使用料でも大儲けした。

他の貴族やジェントリー層もこれにあやかろうとして運河建設ラッシュがおこり、一時は運河の総距離が三〇〇〇マイルにまで及んだ。

鉄道建設も進められた。一八二五年ストックトン・アンド・ダーリントン鉄道は、レールの賃料を取る目的でつくられた。鉄道という意味では新しいが、地代を稼ぐ目的という意味では道路や運河と大差はなかった。

しかし、新興ブルジョアジーは、一八三〇年にイングランド最大の港リヴァプールから大工業地マンチェスターまでの本格的鉄道建設を議会に申請した。貴族ジェントリーにとっては、これまでの利権が奪われる（地代がはいらなく

なる) ことであり、当初は猛反対し、ブルジョアジーとの間で抗争が起こる。抗争は選挙法改正問題とあいまって激烈になる。両者の抗争は穀物法撤廃問題(ブルジョアジーは自由貿易を主張)でもおこり、一八二〇年代後半から三〇年代は議会を支配していた貴族・ジェントリー側の譲歩で落ち着するが、これ以降も鉄道建設は飛躍的(四〇年代には国内全域)に伸びた。

②何故「譲歩したのか、譲歩できたのか」

鉄道の発達によって利権収入を失った中小地主、穀物の輸入の自由化・穀物価格の下落によって農業経営が破綻する中小の農業経営者たちは没落したが、大地主(貴族・ジェントリー)は、国債や植民地への投資による利息で潤い、没落した地主の土地をも買い取り、より広大な土地を持つことで、危機を乗り切ることができたし、大農業経営者も大規模化と生産性の向上で乗り切ることができたのである。

一七八九年のフランス革命の教訓もあり、新興ブルジョアジーと敵対するのではなく、没落した中小地主の土地を新興ブルジョアジーに買い取らせ、新たなジェントリーとして、自陣に取り込むことで支配権を維持しようとしたのである。

5. パブリック・スクールの変遷

①文化的ヘゲモニーとしての「紳士道」

小林章夫氏は著書「イギリス紳士のユーモア」のなかで次のように述べている。

「……土地と家柄を誇る上流階級と富と実権とを手に入れつつある中産階級とでは、まだ互いにもちつもたれつを関係を保ちえる。紳士の次男坊(家を継げない＝引用者加筆)と大商人の娘とが婚儀を結べば、……紳士の方は金、商人は家柄……。」

この「家柄」なるものとは「ジェントルマン(＝紳士)の家柄」という意味である。そして、「紳士」には紳士にふさわしい生き方(＝「紳士道」)があることを吹聴した。それは、一六世紀ごろにもはやされた「騎士道」に由来し、身分としての「騎士」が曖昧となり「ジェントリー」階層(地主階級)に含まれる過程で、「騎

士道」も「紳士道」へと変化し、名士＝ジェントルマンの理念が創り出されたのである。

小林氏は「騎士道」「紳士道」について次のように述べている。

「騎士たるものの生き方は、何事に対しても勇氣と正直とをもってあたり、思いやりや礼儀正しさを大事にし、特に女性にたいしては格別の配慮を」し、「一朝ことあらば、真っ先に戦場に駆けつけるという義務感(高貴なる者に伴う義務……)も重視された。」(同)

「こうして、一八世紀イギリスでは、田舎に住んでスポーツに熱中し、表面的な飾りよりは実質を大事にし、何事にも自然に振る舞うことを重視するイギリス紳士が生まれた。フランス流の機知や虚飾より、大らかなユーモアと愚直とも思えるような正直さとを兼ね備えた「カントリージェントルマン」である。「彼らはスポーツで身体を鍛え、フェア・プレイの精神をことさら吹聴し、時折、それでも都会の空気を吸って、悠々たる態度で日々を過ごした(あるいは過ごしているかに見せた)。」(同)

そして、この理念確立と人づくりに欠かせなかったのがパブリック・スクールであったといわれている。

②パブリック・スクールの成り立ちと変遷

パブリック・スクールの起源は中世のグラマー・スクールに遡るが、これらの学校の中で王侯貴族や金持ちの基金をもとにした学校があらわれ、これら基金立学校は詳細な規則のもとに運営されており、一定数の貧しい少年を無償または安い授業料で入学させることを義務づけていた。

また、教師の給与についても決められていたが、インフレを考慮していなかったので実質給与は著しく低くなり、その改善のために私費制をとることになった。一六世紀にはもう私費制の方が多くなり、一七世紀には、これまで邸宅に家庭教師を雇って教育していた貴族やジェントリー(地主階級)が子弟をこれらの学校に行かせ始めるようになり、パブリック・スクールは上流階級のための学校という意味になる。

一九世紀になると、産業ブルジョアジーや専門職が増え、彼らは子弟の教育のためこのよう

な学校を求めた。特に、五〇年以降の土地の高騰で土地を購入できなくなった彼らは「疑似ジェントルマン」としてのパブリック・スクール「OB」を得ようとした。そして、既存校をモデルにした寄宿制の学校が空前のブームとなる。

③ プリーフェクト＝ファッグ制度

パブリックスクールには、最上級生（シックス・フォーム）の中から任命された生徒にプリフェクト（＝監督生、スクールによってはプリポスターと言う）生として、学校の風紀や秩序維持の仕事と権限を与えていた。

また、上級生がファッグと呼ばれる下級生に靴磨き、部屋の掃除、紅茶の準備といった私的な雑用をさせる習慣があり、言いつけ通りにしないファッグには暴力的な制裁を加えるのが普通であり、この制裁手段にフットボールが利用された。

そして、一九世紀前半にはこの監督生が中心となるケンカや暴動が多発し、一八二五年にはシャフツベリー卿の息子が命を落とす事件まで起き、スクール改革が望まれるようになる。

④ アーノルドのスクール改革

パブリック・スクールにおいて最初に改革に乗り出したのは、ラグビー校のトマス・アーノルドであった。『アーノルドが行ったのは、プリフェクト制度を正式に認め、みずから最上級生の中から監督生にふさわしい生徒たちを選んで任命し、彼らに監督生としての責任を自覚させたことであった。その結果、自覚を促された監督生と最上級生全体は学校内でエリート的な存在になり、下級生に対して「クリスチャン・ジェントルマン」としての道徳的な模範を示すようになった。』（山本浩「フットボールの文化史」）

貴族・ジェントリーなどの上流階級は、「従来のプリフェクト＝ファッグ制度は、上流階級の子弟に階級間の闘争の技術を教えるものであり、いずれ支配階級の一員となる彼らを訓練するのに絶好のもの」として容認してきたが、社会的に力を増した中流階級からの改革の要求が強まったために、上流階級は譲歩することを余儀なくされ、イートン校でも他のパブリック・スクールと同様に、ラグビー校にならってプ

リフェクト＝ファッグ制度の改革がなされたのである。

6. FA の結成までの過程

① 民衆のフットボールの衰退

宗教的意味合いを含み持ちながら続けられてきたマスフットボールは、時々の社会情勢を反映し、時には反為政者の色彩を帯びることもあり度々禁止令が出されてきた。

また、おそらくそれと平行して農閑期などに「空き地のフットボール」も楽しんでいただとも思われるが、一七世紀以降の農業革命、商業革命の進行で土地の大地主への集中（小農民の土地喪失）化が進み、借地農による農業経営が本格化すると、土地の占有的使用（農地の囲い込み）によって空き地も減少し、農閑期の空き地のフットボールもできなくなるのである。

そして、祭りのフットボールは、「囲い込み」の柵を壊すことが目的化するなど政治的色彩も増し、為政者からの禁止措置も年々強まったことが予測できる。

② パブリック・スクールのフットボール

空き地（農地）のフットボールが減少していた頃、パブリック・スクール内では、生徒たちが遊び（下級生いじめも含む）のフットボールを楽しんでいたが、「フットボールなどは肉屋のせがれのやるものだ」などと言った校長がいたくらいで、あくまでも子どもの遊びだったのである。

しかし、アーノルドは改革をすすめる過程で「団体スポーツ」の有用性＝きちんと組織された団体「スポーツ」は、生徒たちの人格陶冶に役立つことに着眼したのである。

③ 成文化された二つのルール

当時のフットボールは乱暴で荒っぽいものであった。ラグビー校の教師たちは、上級生の手をとおして、フットボールを秩序あるスポーツにつくりかえさせようとした。そして、一八四五年に三人の生徒によって、最初の成文化されたルールがつくられた。特徴は、i 「暴力の比重が減少し技術の重要性が増大している」こと。

ii オフサイド、スクラムなどの定義は曖昧であること。iii ランニングインが容認されていることである。

次いで、四九年にイートン校でフットボールのルールが定められた。それは、i 手でボールを掴む、運ぶ、投げる、打つなどの行為はできない＝ランニングインの禁止。ii ゴールは、クロスバーの下を通り、二本のゴールポストの間を通過したときに得点となると定められるなど、ラグビー校のルールとは対照的なものであった。

山本浩氏は「……イートン・コレッジは……二番目に古い名門校であり、生徒たちは貴族やジェントリーといった上流階級の子弟が中心であった。……ラグビー・スクールは……他に先駆けて改革を断行し、多くのパブリック・スクールの改革のモデルとなっただけでなく、……新興の中流階級の子弟を多く受け入れていた。」

「……歴史をもつ名門パブリック・スクールであるイートン・コレッジの側にラグビー・スクールへの対抗意識が強くあり、その意識がラグビー・スクールとは異なるフットボールをもたせることになったようである。」と述べている。

一九世紀の中頃になると、新しく創設されたパブリック・スクールにおいてもスポーツ熱が高まり、チームスポーツとりわけフットボールが教育目的で取り入れられる。しかし、その多くは、『手でボールを扱うことのできるフットボールの方が、「勇敢さ」「不屈の精神」「無私の献身」「チームワーク」を必要とするので生徒たちの訓練にふさわしい。』と考へて、ラグビー校のルールを採用する学校が多かったようである。

パブリック・スクールでは、生徒自らの力でルールを作り、成文化することが重視された。そして、作成されるルールにおいて強調されたのはフェアプレーの精神であった。

④「ケンブリッジ・ルール」

一九世紀の中頃には、パブリック・スクールの卒業生は親しんでいたフットボールを引き続き大学でも楽しむようになっていた。

ところが、いくつものスクールから集まった学生たちが親しんだフットボールのルールはそ

れぞれ異なり、もめることが多かった。

そこで、一八四八年にケンブリッジ大学のなかに委員会がつくられた。イートン、ハロー、ラグビー、シュルーズベリーといった有名なパブリック・スクール六校の卒業生二名ずつと、パブリック・スクールの卒業生以外の二名の計一四名で構成された。

紛糾の末に決められたルールは、i ハッキング、トリッピングの禁止。ii フェアキャッチ後に蹴ることは認められたが、キャッチしたボールを抱えて走ることは禁止。iii 手でボールを扱えるのは、フェアキャッチの時とボールを止める場合のみ許された。これが「ケンブリッジ・ルール」と呼ばれるものであった。このルールは数回のルール変更を経て、六三年の FA 結成に大きな役割を果たすのである。

⑤フットボールクラブの普及と FA 設立

世紀の後半にもなると、パブリック・スクールや大学を卒業して社会人になった者によって、同好の会費制のクラブ（フットボールと社交を楽しむジェントルマンのクラブ）がつけられるようになった。こうして誕生したクラブは、同じパブリック・スクールの卒業生によって組織されたものが多く、「オールド・ボーイズ・クラブ」と総称され、いずれも母校のルールに従ったフットボールをしていた。

しかし、クラブ対抗試合が行われるようになると、統一ルールをつくるが必要となり、一八六三年、バーンズ・フットボール・クラブキャプテンのモーリーの呼びかけで、イングランド全体を統括するフットボール・アソシエーションが設立されることになる。

統一ルールの作成はモーリーが中心となっで行われたが、「ケンブリッジ・ルール」（＝ランニングインとハッキングを認めない）が採用され、ラグビー校ルールを主張したブラックヒース・フットボール・クラブの代表は席を蹴って会議から退場し、FA から脱退した話は有名である。

7. 問題2「サッカーやラグビーは前近代的で古いスポーツなのか？」

解答2：FA 式フットボールは、設立当初は貴族・ジェントリー（旧支配者）がつくり出した文化であった。

彼らジェントリーは、ルール化された秩序あるフットボールを中・上流階級のスポーツとして、国内外の中・上流階級に向けて発信したのである。

しかし、フットボールは元々は民衆に親しまれたゲームであり、ルールによって秩序化されたスポーツは、都市化した社会の労働者にとっては、マスフットボールに比べてより安全で親しみやすいものであった。新しいフットボールは瞬く間にあらゆる階層に広まったのである。

そして、FA の組織運営や競技ルール等において、人びとは、旧支配層とのたたかいを通じて、アソシエーション・フットボールを民衆のスポーツとして取り返したのである。

①アマチュアイズム

パブリック・スクールの卒業生にとって、ラグビーにしるサッカーにしる、スポーツというのはあくまでもアマチュアの楽しみだったのである。

アマチュアとは、金銭のためにスポーツをやるのではない人を意味するだけでなく、スポーツを楽しむ中・上流のジェントルマンをも意味した。

さらに、アマチュアは、フェアプレーを何よりも大切にすることでもあった。アマチュアが重視するフェアプレーというのは、ルールを守ることだけを意味するのではなく、相手と対等の立場でゲームをやるということであり、明らかに有利な立場に立って相手を出し抜くのはフェアプレーがもっとも嫌うことであった。

アマチュア精神のもう一つの特徴は、アマチュアであるジェントルマンは、あくまでも余暇の楽しみとしてスポーツをやるということである。勝つためにありったけの力を振り絞ったり、練習に明け暮れるのもアマチュアではないのである。

②「サッカー」のプロ化

ジェントルマンたちのアマチュアイズムの吹聴にもかかわらず、民衆のなかに広まったフッ

トボールは、中部、北部の工業地域の労働者、教会などを母体にクラブ数が数千にもおよび、その大半が FA 式フットボールのプロ化を支持したのである。

ジェントルマンである FA の理事たちは、組織の分裂を避けるために一八八五年七月にプロ化を容認する新規定を定めるのである。

8. まとめにかえて、

紙面の都合もあり、後半部分の「尻切れ蜻蛉」感が否めない。

イギリス生まれのスポーツには、ジェントリーたちの当時の「紳士道」が色濃く反映しており、彼らのエリート意識、大衆蔑視感が見え隠れする。しかし、一九世紀後半においては、日々の生活の糧を稼がなければならない民衆の立場から、ジェントリーの「エリート意識、大衆蔑視」をスポーツから払い落とした。

その一方で、個人の人格形成を重んじたパブリック・スクールの教育理念やフェアプレーの精神は今もこの球技には生き続けている。

そして、仕事の細分化、専門化しているアメリカ型スポーツに対して、近年のサッカーは、戦術の変化にともない選手の動きに「オールラウンドプレイヤー化」する傾向を強めており、オフサイドルールの存在がそのような戦術や選手の動きをつくり出しているように思えることを述べて、学習ノートを終えることとする。

参考文献、引用文献：◆浜林正夫「イギリス名誉革命史上下」(未来社)、◆編著村岡健次他「イギリス近代史」(ミネルヴァ書房)、◆小池滋「英国鉄道物語新版」(晶文社)、◆竹内 洋「パブリック・スクール (英国式受験とエリート)」(講談社現代新書)、◆小林章夫「イギリス紳士のユーモア」(講談社現代新書)、◆小林章夫著「イギリス精神 (紳士の国のダンディズム)」(PHP 研究所)、◆小林章夫「イギリスの味わい方」(総合法令)、◆伊村元道「英国パブリック・スクール物語」(丸善)、◆山本 浩「フットボールの文化史」(ちくま新書)、◆アレン・グッドマン、谷川稔他訳「スポーツと帝国 (近代スポーツと文化帝国主義)」(昭和堂)

(大阪・東羽衣小学校 ふなとみこうじ)